



パチンコ人口、日本一

(2009-06-21)

パチンコが好きだ。暇があれば、したいと考えてしまう。最近では「逃亡者（のがれもの）おりん」という台でよく遊ぶ。テレビ東京系で以前、放映された時代劇をゲームにしている。鹿児島でも他系列の鹿児島放送（KKB）で平日昼間、“時差放映”されたドラマ。伊佐市出身の俳優・榎木孝明さんが珍しく悪役のボスを演じている。



「すべて実写のパチンコというのは初めてらしいですよ」と、偶然、鹿児島市内の焼酎バーで会った榎木さんが教えてくれた。確かにゲームの展開に他の機種のようにアニメーションはなく、すべて人間が出てくる。しかもパチンコ用に撮り下ろした場面も多いという入れ込みようだ。気さくに鹿児島弁で話してくれた榎木さんが良くて、それまで以上にこの台に打ち込んでしまった。

しかし、この「おりん」に限らず、最近のパチンコはやたら演出が派手で、従来だったら大当たりの前兆のような場面でも外れることが少なくない。やり過ぎでは、と思えるぐらいだ。ここまで刺激的にしないと客がつかないのだろうか。

確かにパチンコ人口は年々減っている。2007年は1450万人で1995年の2900万人と比べるとちょうど半分だ。一方売り上げは約23兆円で、95年の約31兆円より落ちているが、半減はしていない（「レジャー白書2008」より）。ということは客一人当たりの支出額が増えていることなる。

総務省が5年に1回行う「社会生活基本調査」によると、2006年にパチンコをした人の数が人口割りで一番高いのは鹿児島県で15.4%だった。100人（統計上10歳以上）に15人以上の計算。これはパチンコのメッカとされる愛知県（15.3%）よりわずかに多かった。全国平均は11.8%で、宮崎県が14.6%で全国3位だった。

昔、鹿児島最大手のパチンコ経営の社長（当時）と長話したついでに「パチンコしますか」と尋ねた。社長は即座に「私はしません」。パチンコ好きの私としては寂しい気分になったが、考えてみれば経営者自身もパチンコしたら、もっと玉を出し経営に支障が出るかもしれない、と妙に納得もした。

そのパチンコ経営者たちも、ギャンブル性が高まり客が限定されていく現状を憂い、多少は遊べる1円パチンコの導入や、借金苦などパチンコ依存者の悩みに応える電話相談センター「リカバリーサポート・ネットワーク」＝電話050-3541-6420＝を、業界で設けたりしている。

このリカバリーサポートが昨年度1年間の相談内容をまとめた報告書によると、パチンコを始めた年代が男性は10代と20代が大半なのに対し、女性は10代から50代までどの年代からも始めていることがわかった。これは何を意味するのか。

人生には運、不運の波がある。ギャンブルではその波が増幅される。そこに刺激を求めるのかもしれない。運がいい時は簡単に勝ち、一定期間続く。運がない時はどうあがいてもだめだ。で、どうもその期間は運がいい時より長い。マージャンでの運は不思議なぐらい、台の4辺の1辺の場に現れやすい。

ただ、仲間内でだれかが勝つマージャンと違い、パチンコで最終的に勝つのはお店側だ。客である私たちの運・不運は、店の経営という手のひらの上だけの話であることを忘れてはいけない。

【写真】既存店（手前）の後ろに、愛知から鹿児島初進出の店舗がオープンを控える。後方にも既存の2店舗。いずれも県外資本だ＝霧島市中心部

Posted by (宮)

[閲覧(748)][コメント(4)]